



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイルタの振楽器「ヨードプ」：復元工程についてのウイルタ語北方言テキストを中心に
Author(s)	山田, 祥子
Citation	北方人文研究, 4, 25-49
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45281
Type	departmental bulletin paper
File Information	YAMADA.pdf



ウイлтаの振楽器「ヨードブ」

— 復元工程についてのウイлта語北方言テキストを中心に —¹⁾

山 田 祥 子

北海道大学大学院／日本学術振興会特別研究員

はじめに

ウイлта語は、ロシア・サハリン州の先住少数民族ウイлта Uilta(ロシア語の表記法では ujl'ta；ロシア字 уйльта)²⁾の固有の言語である。ツングース諸語(ツングース・満洲諸語)の一つで、そのなかでもナーナイ語・ウルチャ語とともに第Ⅲ群に分類される(Ikegami 2001c [1974]: 395)。方言は、池上(2001a [1994]: 247-248)により、ほぼ北緯50度を境として、サハリン北部のワールVal村を中心とする地方で話される「北方言」と、サハリン中部のポロナISK Poronajsk市(かつての敷香)を中心とする地方で話される「南方言」の二つに分けられる。

1905～1945年、ウイлтаの北のグループはロシア(旧ソ連)の統治下に、南のグループは日本の統治下に置かれた。戦後、日本が南樺太より撤退してからは両方のグループで急速にロシア化が進み、ウイлтаの日常語はウイлта語からロシア語に置き換えられた(Yamada 2010)。2002年のロシア国勢調査では、ウイлтаの全人口346人のうち自分の民族の言語を話せると回答したのは、わずか64人であった(FSGS 2004)。

本稿では、ウイлта民族に伝わる一種の楽器「ヨードブ」(手に持ち振って音を立てる楽器；以下、「振楽器」)についての導的な考察、および、今日「ヨードブ」を制作するエレナ・ビビコワ(Elena Alekseevna Bibikova)さん(1940年生、女性)がその工程を説明するウイлта語北方言のテキス

¹⁾ 本研究の調査に応じてくださった Elena A. Bibikova さん、Irina Ja. Fedjaeva さん、Sirjuko (Ljudmila X.) Minato さん、Ljubov' R. Kitazima さん、ヨードブ制作工程の参与観察で協働した進藤冬華さん、資料調査にご協力くださった Dmitrij A. Chvygajin さん、ノグリキ市立郷土博物館の Tat'jana A. Kartavyx 館長、北海道立北方民族博物館の笹倉いる美さん、日頃からご指導くださり文献収集にご助力くださった指導教員の津曲敏郎先生に、心より感謝の意を表する。なお、本研究は文部科学省科学技術研究費補助金(特別研究員奨励費；21・2110)の助成を受けて行われた。

²⁾ 民族名称にはばらつきが見られる。かつては日本でオロコ、ロシアで orok と呼ばれた。一方、今日ロシアの現地社会では自他ともに orochon という呼称が最も通用している(Missonova 2006: 64, 2009: 196 にもとづく)。近年の出版物では、日本でウイлтаあるいはウィルタ、ロシアで ujl'ta あるいは ul'ta と呼ばれることが多くなった。筆者のフィールド調査によると、2011年1月現在、ウイлта語の発音と文字教本(Ikegami et al. 2008)の表記法により uilta、もしくは、ロシア語の軟音記号を補って uil'ta と記すべきだという主張が一部のウイлтаのうちで強まっているが、一般には浸透していない。本稿では、近年の代表的な民族誌である Roon (1996)、Missonova (2006) にもとづき、ロシア語表記を ujl'ta とする。

トを写真・文法注記とともに提示する。ウイルタの文化伝承において一時断絶と復興を経て今日に生かされる「ヨードプ」の歴史を導入とし、ウイルタの現在を記録する言語・民族誌的資料の提供を、主な目的とする。

前半(1節)では、振楽器「ヨードプ」についての導入的な考察を述べる。その結論として、第一に、“joodopu”という語が南方言に由来すること、第二に、本テキストで語られる「ヨードプ」の制作工程は直接的に継承されたものではなく、伝統的な知識・技巧の集積の上に成り立った「復元」であるということを確認する。

後半(2～4節)では、「ヨードプ」の作り方を説明するウイルタ語北方言のテキストを、言語・民族誌的資料として提示する。そのうち2節では、テキストの採録方法・表記方法などの概要をまとめる。そして3節では、テキストを写真・文法注記とともに提示する。最後に4節では、同じテキストのロシア語表記・ロシア語訳を提示する。ロシア字表記は語り手に直接目で見ても正当性を確認してもらった。ロシア語訳は語り手自身による訳を筆者が口述筆記したものである。これらの意味で、語り手の直観に最も近い資料として本稿に加える。

1. 「ヨードプ」の復元

1.1 南のウイルタにおける「ヨードプ」

本節では、「ヨードプ」について導入的な考察を述べる。「ヨードプ」とは、最も端的には「手にもち振って音をたてる神事用具」と説明される(池上1982:82)。次頁 *Illust. 1-1, 1-2* の資料は、戦前に日本統治下にあった南のウイルタから収集され、現在日本国内に保存されている。

1928、1930、1932、1935年の4回にわたって当時のオタス(現在のセーヴェルヌイ Severnyj 村)³⁾ ほか敷香(現在のポロナイスク)周辺でウイルタを調査した澗瀉久治氏は、戦後も北海道への移住者から情報を集めてウイルタ語の辞書を大成した。「ヨードプ」(jōdopu(n))の項目には、以下の説明を当てている。⁴⁾

jōdopu(n) シャーマンの前踊りの者が両手に持って重ね打ちして調子をとる拍子具(杓子形長さ八寸ぐらい、末端が鼓状で両面を鮭の皮またはトナカイのなめし皮で張り、中に豆、米、小石を入れて音を出す、下部に木の柄がついている)(澗瀉1981:100)

オタスでシャーマンと呼ばれる人々が活躍していたことは、Vishnevskij(1994:128-134)によって知られるところである。同書によると、彼らはしばしば病氣治癒のためにその能力を発揮した(ibid.:129)。かつてオタスのオロク集落に住んでいた人々は現在[筆者注:刊行時の1994年]まで自分たちのシャーマンを覚えているという(ibid.:128)。同書のなかでオガワハツコ氏はシャーマンによる病氣治癒について回想し、次のように「ヨードプ」にも言及している。

³⁾ 樺太庁は1927年1月に敷香郊外のオタス(あるいは「オタスの杜」)にアイヌ民族を除く南樺太の先住諸民族を集住させて保護する政策を実施した(菊池1997:559)。

⁴⁾ その他の辞書的記述、および北海道立北方民族博物館所蔵の資料については、山田・笹倉(2010:103)を参照されたい。



161. 手にもち振って音をたてる神事用具 jodopu 長さ27 網走市立郷土博物館蔵品

Illust.1-1 「ヨードプ」(1)

池上 (1982: 82) より転載。なお、写真資料は 2010 年現在、北海道立北方民族博物館に所蔵されている (笹倉 p.c.)。⁵⁾



162. 手にもち振って音をたてる神事用具 jodopu 国立民族学博物館蔵品

Illust.1-2 「ヨードプ」(2)

池上 (1982: 82) より転載。

アウンダウ [筆者注：ウイルタの円錐型の家屋] の入り口の近くで女性たちが踊りはじめた。一人の男性が dali (太鼓) を打った。女性たちはシャーマンの帯 “jakpa” と振楽器 “jodopu” を順に手渡した。その後、男性が帯を着け太鼓を持って焚き火のまわりを踊った。[...] 人々が踊っていると、神々がやってくる。[...] 踊る人が多いことはシャーマンには都合が良く、彼の仕事を周りから援助する。(Vishnevskij 1994: 129; Ogawa Xatsuko の語りより；筆者訳。なお、“ ” の有無は原文どおり。)

⁵⁾ 北海道教育庁振興部文化課 (1974: 巻頭グラビア) および潤瀉 (1981: 巻末 35) 掲載の写真も同一の資料のように見えるが、確認の必要がある。

上述の潤潟(1981:100)のいう「シャーマンの前踊り」も、このような状況を示唆したものだったと推測される。

さらに1990年代には、ポロナISK市で活動する民族アンサンブル「メグメ・イルガ Mengume ilga」⁶⁾で、オガワハツコさんとキムナツコさんの独演により振楽器を使ったウイльтаのシャーマンの踊り「ヨードプヨードリ jodapu-jodari」が披露された(Mamcheva 2003: 45、S. Minato (以下、ミナト)、L. R. Kitazima (以下、キタジマ) p.c.)⁷⁾。オガワさん、キムさんは自ら「ヨードプ」を制作していたというが、お二人が亡くなられて以来、南のウイльтаでは誰も制作していない(ミナト、キタジマ p.c.)。

以上、池上(1982)、潤潟(1981)、Vishnevskij (1994)の記述から、南のウイльтаにおける「ヨードプ」について確認した。その特徴は、おおむね、上に引用した潤潟(1981:100)の辞書的記述に集約される。さらにVishnevskij (1994)などから、「ヨードプ」を女性が両手に持って踊ったこと、また、そうした記憶が少なくとも1990年代までは語られ、制作・使用ともに継承されていたことがわかる。2000年以降現在にいたる状況については、1.5節で後述する。

1.2 ニヴフ民族の振楽器

ここで注意を向きたいのは、南のウイльтаで記述された「ヨードプ」と共通の道具が、隣接するニヴフ民族にも見られるということである。本節では、高橋(2006 [1929])、米村喜男衛氏の調査報告(北海道教育庁振興部文化課(編)1974: 27-63)、およびMamcheva (2003)にもとづき、ニヴフの振楽器について述べる。

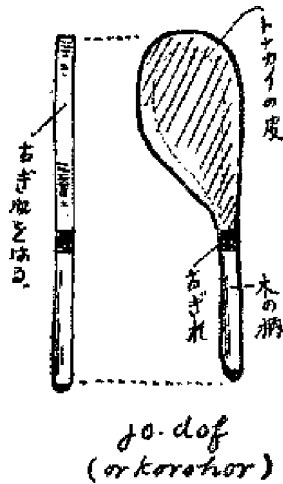
1928年に日本領樺太のニヴフ(原文では旧称で「ギリャク」)民族を訪ねた高橋盛孝氏は、ポロナイ川上流の保恵⁸⁾でシャーマンの行事を依頼して観察し、その様子を記述した。そのなかで、ニヴフの娘が両手に持って踊った道具「jo.dof/ヨードフ」について、以下のように言及している(高橋2006 [1929]: 62)。また、後掲の図解(IIIust. 1-3; 高橋2006 [1929]: 65)では、jo.dofの別名として括弧内に「korohor」と記されている。

始にボーコン[筆者注: 保恵に住んでいたニヴフ男性]の娘(jašjka)がjanpanをこしにつけて、腰をふりつつ両手のjo.dofを相打つて踊った。jo.dofには豆が入つてゐてガラガラとなる。相打つと恰度タンブリンのやうな音がする。Janpanはたへず金属的なひびきを立ててゐる。女は立つたままでやり、男はゐろりのまわりを廻りつつやるという。[...]左のかたで三度ヨードプを打ち、すぐ右のこしの所で又三度打つ。かくてくりかへしつちャチャチャンーチャチャチャンと交互に上下で鳴すのである。そのたびにこしをゆりうごかす、衣服は常のまま頭にtšongr'-nau(頭のイナオ)をつけてゐるだけで同じやうに尻をふりつつ舞ふ。(高橋2006 [1929]: 63)

⁶⁾ この名称はナーナイ語の məŋmə ilga「銀飾り」にもとづく(S. Minato p.c.)。

⁷⁾ 同書は、この振楽器のウイльта語名称を「ヨードプ jodapu」「ヨードプトウ jodaptu」と記述している(Mamcheva 2003: 46)。L. R. Kitazima (p.c.)によると、後者は「ヨードプを使った踊り」を意味する。

⁸⁾ Vishnevskij (2000: 165)によると、現在のBujuklyに当たる。



Illust.1-3 高橋 (2006 [1929]: 63) 図解

また、1944年にオタスを訪れた米村喜男衛氏は、Illust.1-4のような形状の楽器として、「両面を鮭の皮で張り、中に豆などを入れて、振れば、カラカラと鳴る。2本で1組として使う。両手に持って振る」ものの名称を「コロホル」と記述している（北海道教育庁振興部文化課（編）1974：38）。

(2) コロホル



Illust.1-4 北海道教育庁振興部文化課（編）（1974：38）図解

同書（北海道教育庁振興部文化課（編）1974）の巻頭グラビアでは、Illust.1-1（池上 1982：82）掲載写真と同一物と思われる資料のキャプションに「オロッコ語 [筆者注：ウイルタ語] koroholu コロホル」と記載されている。これが本来のウイルタ語であるか、ニヴフがウイルタ語名称を紹介したのか、それとも編集上ニヴフ語と混同したのか、ということは明らかではない。

近年の研究として、サハリン先住民族の儀礼用楽器についてまとめた Mamcheva (2003：45) は、ニヴフのクマ送り儀礼における女性の儀礼踊り тигд [表記ママ] で用いられた振楽器に言及した。そこでは女性が魚皮製の特別な衣装を身につけ、頭を削りかけで飾り、両手に一つずつ振楽器を持って、丸太の楽器の伴奏のもとで踊ったという (ibid.)。この振楽器を表わすニヴフ語の名称について、Mamcheva (2003：46) は「先行記述およびインフォーマントからの情報によってさまざまな名称や発音が見られる」（筆者訳）と述べ、以下のようにニヴフ語の名称を列記した。ニヴフ語表記は原文のまま、出典に当たる先行記述⁹⁾、方言およびインフォーマント名は本稿の方針に合わせて翻訳・転写する。

горхкоph (アムール方言)、корг'ор, корг'орш (サハリン方言) (Shejkin 1996: 60)、к"оророр (Krejnovich 1973: 476)、кор кор (Njavan)、корш-корш (Shkalygina)、кор ғош (Ulita, Muvchik)、корроу (Steshenko-Kuftina 1930: 87)、к'орғорс, коргоску, корх (Хейн)、корхосш (Brodskij 1978) (Mamcheva 2003: 46)

以上に挙げた高橋 (2006 [1929])、米村喜男衛氏の調査報告 (北海道教育庁振興部文化課 (編) 1974: 27-63)、および Mamcheva (2003: 45-46) で記述された道具は、前節で参照した池上 (1982: 82) や潤潟 (1981: 100) の記述する「ヨードプ」と形状や用途が共通する。このことから、南のウイルタが用いた振楽器「ヨードプ」が、当時ポロナイ川地域のニヴフの間でも用いられていたと推定できる。

また、Mamcheva (2003: 45-46) により、ニヴフにおけるこの振楽器の名称は、おおむね「コホル」に近いものだったと推測される。しかし、高橋 (2006 [1929])、米村喜男衛氏の調査報告 (北海道教育庁振興部文化課 (編) 1974: 27-63) を参照するかぎりでは、戦前の日本領に居住したニヴフが同様の楽器を「ヨードプ」と呼んでいた可能性、また逆に南のウイルタが同様の楽器を「コホル」と呼んでいた可能性もある。このように、少なくとも戦前の南の地方における記述のうえでは、二つの異なる民族間で名称が混交して複雑な様相を呈している。これが記述者の混同によるものか、それとも実際に名称の混交が起っていたのか、今後の精査が必要である。

1.3 北のウイルタにおける「ヨードプ」

前節まで南のウイルタおよびニヴフの状況について述べたが、ここで北のウイルタに目を向ける。

北のウイルタについて、1928年夏にサハリン北部トィミ Tym' 川河口地域を調査した B. A. Vasil'ev は、シャマニズムの説明において「女性は neo6i [表記ママ; 以下同様] という振楽器⁹⁾を用いる。これはオロチのものや、クマ送り儀礼でギリヤークが用いるものと似ている」(Vasil'ev 1929: 20; 筆者訳、以下同様) と記述している。この説明から「neo6i という振楽器」は本稿でいう「ヨードプ」に当たると考えられるが、名称は前節までに見てきたどの名称とも一致しない。

ただし Vasil'ev (1929: 20) は、「1925年に最後のオロク [筆者注: ウイルタ] のシャーマンが亡くなり、現在オロクにはシャーマンがいない」と指摘している。この記述から、北のウイルタでは1920年代にシャマニズムが衰亡したと考えられる。そうだとすれば、シャーマンの道具である「neo6i という振楽器」ないし本稿でいうところの「ヨードプ」は、1920年代にはすでにその本来的な意味を失ったといえる。

本稿後半に掲載するテキストの語り手である E. A. Bibikova (以下、ビビコワ)さんは、1945年前後に故 Darija Gavrilova さん (1888年生、ウイルタ名 Nogdopo、ビビコワさんの祖母の姉妹) がコルホーズの年末の会合で「ヨードプ」と同様の振楽器を両手に持って踊りを披露したときのこ

⁹⁾ Mamcheva (2003) の引用文献 (筆者未見; 引用順): Shejkin Ju. I. 1996 *Muzykal'naja kul'tura narodov Severnoj Azii*. Jakutsk./ Krejnovich E. A. 1973 *Nixgu. Zagadochnye obitateli Saxalina i Amura*. Moskva./ Steshenko-Kuftina V. L. 1930 "Elementy muzykal'noj kul'tury paleoaziatov i tungusov". *Etnografija*. No.3, pp.132-135./ Brodskij I. A. (Bogdanov) 1978 *Muzyka narodov Dal'nego Vostoka SSSR*. Moskva.

¹⁰⁾ ロシア語 pogremushka の和訳として「振楽器」を当てる。以下同様。

とを覚えている¹¹⁾。しかし、それ以来その踊りを見た記憶はなく、おそらく故 Gavrilova さんがその楽器の最後の継承者だったのだらうと話す。ビビコワさん自身、振楽器の名称や詳細について誰からも聞いたことがなかったという。

ウイルタ語北方言の語彙を多く収録する辞書である Ozolinja (2001: 115)、Ozolinja & Fedjaeva (2003: 53) は、*“joodopu(н)”* [表記ママ] を「古語：シャーマンの太鼓用の打木、拍子木」と記述した。語意については gisipu との混同による誤りであろうと考えられる（ビビコワ、I. Ja. Fedjaeva p. c. にもとづく；山田・笹倉 (2010: 103) も参照）。だが、この語を「古語」とした指摘は重要であり、少なくとも北のウイルタで、長い間「ヨードプ」に当たる語が用いられなかったということを裏付けている。

以上の情報から、筆者は北のウイルタにおける「ヨードプ」の歴史を次のように考える。Vasil'ev (1920: 20) の記述は、少なくとも戦前までは、南のウイルタでいうところの「ヨードプ」に相当する楽器が北のウイルタにも存在したということを裏付けている。ただし、1920 年代にはシャマニズムの道具としての機能が失われ、その後 1940 年代まではイベントの出し物のなかでのみ存続していた。そして、1940 年代以降には踊りも楽器の名称も継承されることなく断絶した。

1.4 ビビコワさんによる「ヨードプ」の制作

以下、本節の内容は、すべてビビコワさんへの聞き取りにもとづく。

ビビコワさんは、1940 年バウリ Bauri 川地域ダーギ Dagi のトナカイ飼育キャンプ地で生まれた¹²⁾。父はエヴェンキ、母はウイルタ。1948 年に寄宿制の学校に入ってからでも休暇時はキャンプ地に帰省し、弟妹の世話や母の手仕事（縫物など）を手伝ったという。1961 年に教職に就き、小学校、幼稚園、文化会館などで勤めた。

上述のように、ビビコワさんは 1945 年頃（5 歳前後）に「ヨードプ」に相当する楽器を一度見て以来、長い間実物を目にするのがなく、名称も知らなかった。しかし 1990 年代中頃、池上 (1982: 82) 掲載の写真 (Illust. 1-1, 1-2) で「ヨードプ」を見たとき、幼少期に故 Gavrilova さんがこれと同じ楽器を振って踊っていた様子を思い出し、強い関心を抱いたという。そして、池上 (1982: 82) の写真 (Illust. 1-1, 1-2) 下キャプションによって、*“joodopu”* という名称を初めて知ったのだと話す。

それ以来、子どもの頃キャンプ地で見聞きした白樺の加工法（切断、かんながけなど：cf. 本稿 3 節(4)）、魚皮の利用法（接着剤として：cf. 同(14)）、文様の作り方（cf. 同(16)）などを総合したうえ試行錯誤を繰り返し、作り方を確立した。2006 年から、ノグリキで娘 V. V. Osipova さんの経営する工房 *“Gevva”* で民芸品として「ヨードプ」を制作・販売している。筆者の調べた限り、今日サハリンで「ヨードプ」を制作しているのは、ビビコワさんただ一人である。

¹¹⁾ ビビコワさんの従姉妹の I. Ja. Fedjaeva さんも、この踊りを一緒に見たという。後述 1.5 節。

¹²⁾ ウイルタの基本的な生業分野は、トナカイ飼育、漁撈、狩猟である（Missonova 2006: 142, 2009: 178）。トナカイ飼育は、南のウイルタで 1930 年代末までにほとんどすべて見られなくなったことに対し、北の地方ではコルホーズでのトナカイ飼育において季節的移住が続けられた（Roon 1996: 159/ローン 2005: 163-164、および Missonova 2006: 6, 2009: 178 も参照）。

1.5 今日のサハリンにおける「ヨードプ」の使用

「ヨードプ」の使用に関しては、近年イベントの出し物のなかで見ることができる。

前述(1.1節)のポロナISK市における民族アンサンブル「メグメ・イルガ」の活動は、現在も続いている。同アンサンブルに参加したミナトさん、キタジマさんは、1990年代に故オガワさん、故キムさんから「ヨードプ」の踊りを習った。ただし、上述のようにお二人とも「ヨードプ」の制作方法は受け継がなかった(ミナト、キタジマ p.c.)。

一方、北のウイльтаにおいては、近年 I. Ja. Fedjaeva (以下、フェジャエワ) さんが歌謡の拍子具として「ヨードプ」を用いる。振り付けは、母親から受け継いだ歌謡のリズムに合わせて、自分で考えたと話す。フェジャエワさんは、上述のビビコワさん同様、幼少期に「ヨードプ」に当たる楽器とその踊りを見た一人であるが、その時に見た踊りの振り付けまでは再現できないという。

2008年4月にユジノ・サハリンスク市で行われたウイльта語文字教本(Ikegami et al. 2008)出版記念セレモニーでは、ミナトさん、フェジャエワさんが、「ヨードプ」を使ったパフォーマンスを披露した。さらに2009年6月には北海道大学で催された講演会・コンサートでもフェジャエワさんが「ヨードプ」を両手に振ってウイльта語の歌を披露した(山田 2010b: 65)。これらの場でミナトさん、フェジャエワさんの用いた「ヨードプ」はビビコワさんが制作したものである(ビビコワ、ミナト p.c.)。

1.6 まとめ:「ヨードプ」の復元

本節のまとめとして、特に以下の2点を強調したい。

第一に、“joodopu” ないし「ヨードプ」という名称は、戦前のポロナイ川地域に居住した南のウイльтаが話した南方言に由来する。一方、北のウイльтаでは、少なくとも戦前まで「ヨードプ」と共通の楽器が存在したことがわかるが、1940年代を境に断絶したとみられ、北方言におけるかつての名称は定かではない。

第二に、今日ビビコワさんの手で制作される「ヨードプ」は、南のウイльтаに継承された文化に、ビビコワさんが北のウイльтаの伝統生活のなかで培った知識・技巧が加わった「復元」である。その意味で、かつて南のウイльтаに継承された制作方法とは異なる可能性は少なくないが、北のウイльтаに伝わった白樺加工・魚皮利用・文様の切り方など知識・技巧の集積としての文化的価値は高い。

以上、本節ではウイльтаの文化伝承において一時断絶と復元を経て今日に生かされる「ヨードプ」の歴史を考察した。これを前提としたうえで、以下、今日における「ヨードプ」の制作工程を説明するウイльта語北方言テキストを提示する。

2. 本テキストの概要

2.1 採録方法

3節に掲げるテキストの採録方法は次のとおりである。まず2010年10月11~19日、ノグリキにおいてビビコワさんが「ヨードプ」を作る工程に立ち会い、参与観察を行った。本稿に掲載する写真は、特に注記のないかぎり、この参与観察を協同した進藤冬華さんが撮影したものである。のち10月27日、「ヨードプ」の制作方法をウイльта語で説明していただき、筆者が口述筆記した。その

後11月3日、ビビコワさんとともにテキストの内容・表記をロシア字表記で確認し、ビビコワさん自身によるロシア語訳を記録した(この時のロシア字表記とロシア語訳を4章に提示する)。また同日、テキストの内容と写真との照応を確認した。12月3日、写真の説明文を口述筆記した。

2.2 表記・分析方法

3節では、1行目：ウイルタ語音韻表記、2行目：ウイルタ語基底形、3行目：英語グロスという段組みで表記したものの下に、日本語の意識を記す。

1行目および2行目では、池上(1997: xi-xvi)をもとに、母音音素/a, ə, o[ɔ], ɵ[o, ɔ̃], u, i, e/, 子音音素/p, b, t, d, č[tʃ], ʃ[dʒ], k, g[g, ɣ~ɣ]¹³⁾, m, n, ɲ, ŋ, l, r, s, x, w, j/によってウイルタ語を表記する。

2行目では、接尾辞や語尾の基底形を表わす際、母音調和により a~o~ə~ɵ と4交替する母音をA、o~ɵ と2交替する母音をOで表わす。¹⁴⁾

2行目および3行目の分析では、単純に接着する場合の形態素境界を-、融合¹⁵⁾する場合の形態素境界を+で表わす。

分析には、語り手本人への聞き取りのほか、Ikegami(2001a[1959]、2001b[1974])、池上(1997、2001b)、Tsumagari (2009)、Ozolinja (2001)、Ozolinja & Fedjaeva (2003)を参考にした。

2.3 テキストの特色

資料として用いる際に注意すべき本テキストの特色を述べておく。第一に、上述のように本テキストは聞き書きで採録したものであり、語り手は数単語ずつ慎重に考えながら文を組み立てている。そのため、とくに語順など、自然な発話とは異なる可能性がある。

第二に、本稿の形態分析はあくまで試行的なものである。先行研究には戦前の南のウイルタ出身の話す南方言にもとづくものが多く、方言差だけでなく言語変化を経た相異もある今日の北方言にそのまま適用できるかどうかは目下の検討課題である。

¹³⁾/g/は、[ɣ~ɣ]は母音間および/l, j/の前でのみ現れる異音とみなされる(Petrova 1967、池上 1997 ほか、Tsumagari 2009 など)。筆者のフィールド調査において若干の反例(muiggəə[muiɣɣə:]「へびを」、ku čiggəə[kučiɣɣə:]「ナイフを」など)が見られるが、こうした例をどのように扱うかは今後の課題とする。

¹⁴⁾今日の北方言ではɵの出現頻度が低く、とくに接尾辞・語尾の母音がɵに交替しない例が多々ある(əbuddooni(< ə-buddOO-ni: NEG-PURP-3SG)「～しないように」など)。本テキストでも/ɵ/は一例も見られない。北方言の音素設定にかかわる重要な課題であるが、本稿では考察の対象としない。

¹⁵⁾ウイルタ語では、他のツングース諸語同様のいわゆる膠着型の形態構造をとるが、しばしば語中の隣り合う形態素が融合する(津曲 1988: 745、池上 2001: 157 にもとづく)。どのような場合に融合が起こるかは、原則として、語尾の種類と語幹末の音韻構造によって決まる(津曲 1988: 745、Tsumagari 2009: 4)。ただし、一部の語彙の対格変化、および倚辞的な形式の結合において融合形と接着形(単純に接着する形)の「揺れ」が見られることもある(山田 2010a: 86-87)。

3. ウイルタ語北方方言テキスト：「ヨードプ」の作り方

- (1) **xooni joodopumba andupuri.**
 xooni joodopu(n)-bA andu+bu-ri
 how joodopu-ACC make+IPSN-IM.P
 どのようにヨードプを作るか。
- (2) **joodopumba andumi xaidda čipaali naada:**
 joodopu(n)-bA andu-mi xai=ddA(A) cipaali naada
 joodopu-ACC make-COOR.CVB what=EMPH altogether necessary
pee mooni, sundatta, səurə, suurakta, kamdu.
 pee moo-ni sundatta səurə suurakta kamdu(n)
 white.birch bar-3SG fish silk.cloth beads glue
 ヨードプを作るにはいろんな物が必要です：白樺の枝、魚、絹、大玉ビーズ、接着剤。
- (3) **dooduni əksəuri jollooddoo girapsaaddaa**
 doo-du-ni əksə+bu-ri jolo+bA=ddAA girapsa+bA=ddAA
 inside-DAT-3SG put+IPSN-IM.P stone+ACC=EMPH bone+ACC=EMPH
nučiikə nučiikə abdumba.
 nučiikə nučiikə abdu(n)-bA
 small small goods-ACC
 その中には、石や骨など小さい物を入れます。
- (4) **pee moowani tubguri, čungulluri¹⁶⁾,**
 pee moo-bA-ni tubgu+bu-ri čunguli+bu-ri
 white.birch tree-ACC-3SG drop+IPSN-IM.P cut+IPSN-IM.P
xoowwuri, ərəpčinəddəuri.
 xoo+bu-ri ərəpčinə-dA+bu-ri
 chop+IPSN-IM.P plane-VLZ+IPSN-IM.P
 白樺の枝を切り取り、切断し、打ち割り、かんなをかけます。¹⁷⁾ → *Illust.2, 3, 4, 5*
- (5) **čogočči naada sognut'¹⁸⁾ lapamji duu**
 čogočči naada sognut' lapa(n)-ji duu
 after.that necessary bend very.firmly-INS two
soowani ujjuri xoldobuddooni.
 soo-bA-ni ui+bu-ri xoldo-buddOO-ni
 end-ACC-3SG bind+IPSN-IM.P dry-PURP-3SG

¹⁶⁾ [llu] > 口蓋化 [lʰu]

¹⁷⁾ 筆者が観察した作業の際、かんな ərəpčinə (*Illust.4*) が壊れていたため、ナイフで代用して削った (*Illust.5*)。ナイフで削る場合は geewwuri という (*Illust.5*)。

¹⁸⁾ 聞き取りの際、ウイルタ語の mokčuu-la- という動詞を思い出せなかったためロシア語で言った。のち、写真 *Illust.6* の説明をつける際に思い出して、mokčuellauri という語を用いた。

そして、曲げて、その両端をしっかりと結んで、乾かします。→ *Illust.6, 7*



Illust.2 ヨードプの枠組みとなる樺材

čųḡgulipula	pee
čųḡguli-pulA	pee
cut-IPSN.PRF.P	white.birch
moonī	
moo-nī	
bar-3SG	
切断された白樺の枝	



Illust.3 工程(4)で「打ち割る」様子

xoowwuri
xoo+bu-ri
chop+IPSN-IM.P
打ち割る



Illust.4 工程(4)で道具となる「かんな」

ərəp̚c̥inə
ərəp̚c̥inə
plane
かんな

写真上：表面 写真下：裏面

(筆者による撮影：長さ約 31 cm：ノグリキ町立郷土博物館蔵)



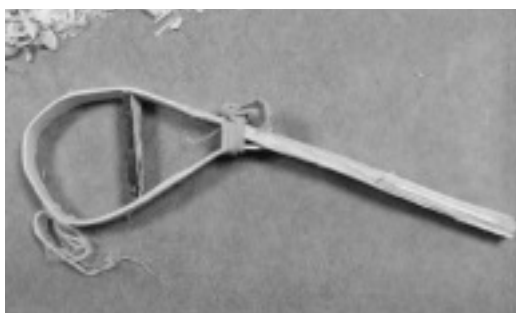
Illust.5 工程(4)でかんながけの代わりに
ナイフで削る様子

joodopuŋatu	moowo
joodopu-ŋAtu	moo-bA
joodopu-ADJ	bar-ACC
geewwuri	
gee+bu-ri	
shave+IPSN-3SG	
ヨードプ用の棒を削る	



Illust.6 工程(5)で「曲げる」様子

joodopugatu **moowo**
 joodopu(n)-ŋAtu moo-bA
 joodopu(n)-ADJ bar-ACC
mokčuullauri
 mokču-lu+bu-ri
 bent-VLZ+IPSN-IM.P
 ヨードブ用の棒を曲げる



Illust.7 工程(5)で「乾かす」様子

joodopu **səgərini**
 joodopu(n) səgəri-ni
 joodopu skeleton-3SG
xoljeeni
 xoldo+ri-ni
 dry+IM.P-3SG
 ヨードブの骨組が乾く

- (6) **xoljeeduni** **sundattaʃi** **oibonʃipu.**
 xoldo+ri-du-ni sundatta-ʃi oibon+ri-pu
 dry+IM.P-DAT-3SG fish-INS take.care.of+IM.P-1PL
 乾かしている間に、魚の処理をします。¹⁹⁾

¹⁹⁾ サケ・マス類、カジカ、カレイなど、皮がある程度厚く、「ヨードブ」の片面を覆う程度の大きさのある

- (7) **sundatta subguni xəsiktəəni xəsisipu.**
 sundatta subgu-ni xəsiktə+bA-ni xəsi-si-pu
 fish fish.skin-3SG scale+ACC-3SG remove.scales.from.fish-IM.P-1PL
 魚皮のうろこを取り除きます。
- (8) **xəsigəččeeri, annooni, jōččooni**
 xəsi-kAččeeri anu+bA-ni jōččo+bA-ni
 remove.scales.from.fish-SUB.PL.CVB FIL+ACC-3SG fat+ACC-3SG
xəərripu.
 xəəri+ri-pu
 scrape+IM.P-1PL
 うろこを取り除いたら、えーとあれ、脂肪を擦り取ります。
- (9) **muutəi ulagaččeeri silčipu.**
 muu-tAi ula-kAččeeri siltu+ri-pu
 water-DIR soak-SUB.PL.CVB wash+IM.P-1PL
 水に浸した後、洗います。
- (10) **ullepu meelalu muutəi.**
 ula+ri-pu meela-lu muu-tAi
 soak+IM.P-1PL soap-PROP water-DIR
 石鹸水に浸します。
- (11) **siltugaacči siltugaacči, ullepu dausulu muutəi.**
 siltu-kA[A]čči siltu-kA[A]čči ula+ri-pu dausu-lu muu-tAi
 wash-SUB.CVB wash-SUB.CVB soak+IM.P-1PL salt-PROP water-DIR
 よく洗ってから、塩水に浸します。
- (12) **xəɾə xəɾə čadu biini tari subgu.**
 xəɾə xəɾə ča-du bi+ri-ni tari subgu
 a.little a.little that-DAT COP+IM.P-3SG that fish.skin
 少しだけそのまま置きます。
- (13) **čaggoori sipirripu, joodopunggoori**
 ča-ɣu+bAri sipiri+ri-pu joodopu(n)-ɣu+bAri
 that-AL+REF.PL wring.out+IM.P-1PL joodopu(n)-AL+REF.PL
səgərikkeeni tulleepu əwəsəi tawasai toonimari.
 səgəri-kkee-ni tulə+ri-pu əwəsəi tawasai tooni-mAri
 skeleton-PRL-3SG gill+IM.P-1PL this.DIR that.DIR pull-COOR.PL.CVB
 それをしほり、(皮を) あちこち引っ張りながら骨組に取り付けます。→ *Illust.8*

魚を選ぶ。写真はギンザケ。鮮度が落ちると皮やうろこがはがれにくくなるので、新鮮なうちに手早く処理をする。テキストでは説明が省略されているが、魚から皮を剥いだ後、平面上に魚皮を広げ、ナイフの背などでうろこを擦り取る。



Illustr.8 工程(13)

sundatta	subgooni	joodopu
sundatta	subgu+bA-ni	joodopu(n)
fish	skin+ACC-3SG	joodopu
səgərikkeeni	tulləuri	
səgəri-kkee-ni	tulə+bu-ri	
skeleton-PRL-3SG	gill+IPSN-IM.P	
魚皮をヨードプの骨組に取り付ける		

- (14) **məənə** **kamduji** **lip** **dakseeni** **mootoi**
 məənə kamdu(n)?-ji lip daksa+ri-ni moo-tAi
 REF.NOM glue-INS exactly stick.to+IM.P-3SG bar-DIR
tari **subgu.**
 tari subgu
 that fish.skin

魚皮は、それ自体の接着剤でぴったりと棒に貼り付きます。

- (15) **əwweepəni** **tawweepani** **daksaukkačči** **xoljipu.**
 əwwee+bA-ni tawwee+bA-ni daksa+bOOn+kA(A)čči xolji+ri-pu
 here+ACC-3SG there+ACC-3SG glue+CAUS+SUB.CVB dry+IM.P-1PL
 両面を張り付けてから²⁰⁾、乾かします。

- (16) **xoldoutannee** **irgaa²¹⁾** **andusipu**
 xoldo+kutA-nnee irga+bA andu-si-pu
 dry+PRF.CVB-3SG pattern+ACC make-IM.P-1PL
dəwəmi.
 dəwə-mi
 cut.pattern.for.applique-SUB.CVB
 それが乾いたら、縫い付け飾りの模様を作ります。→ Illustr.9

²⁰⁾片面ずつ貼り付け、枠からはみ出す部分はハサミで切り取る。

²¹⁾池上 (1997: 81) では irga の対格形は irgamba とある。



Illust.9 工程(16)

saipula	irga
sai-pulA	irga
draw-IPSN.PRF.P	pattern
描かれた模様 (模様の下絵) ²²⁾	

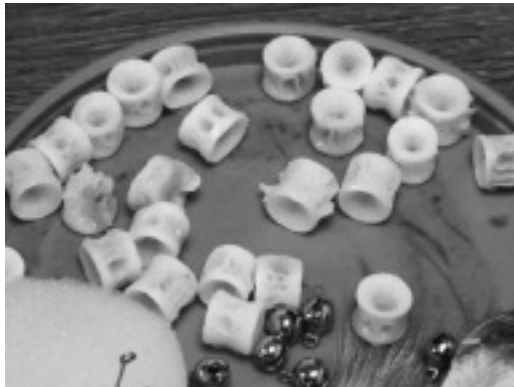


Illust.10 工程(17)

irgaa	kamduĵi
irga + bA	kamdu(n)?-ĵi
pattern + ACC	glue-INS
daksaumburi	
daksa + bOOn-bu-ri	
glue + CAUS + IPSN-IM.P	
模様を接着剤で貼り付ける	

- (17) **čagpoori** **kamduĵi** **daksaunĵipu.**
 ča-ŋu + bAri kamdu-ĵi daksa + bOOn + ri-pu
 that-AL + REF.PL glue-INS glue + CAUS + IM.P-1PL
 それを接着剤で貼り付けます。→ **Illust.10**

²²⁾ この後、小さなハサミで下絵に沿って模様を切り取り、(17)ないし **Illust.10** の工程に進む。



Illust. 11 工程(19)で中に入れる「骨」

nalduma niriktaani

nalduma nirikta + bA-3SG

taimen vertebra + ACC-3SG

əksəuri

joodoputai

əksə + bu-ri joodopu(n)?-tAi

lay + IPSN-IM.P joodopu-DIR

イトウの椎骨をヨードブに入れる²³⁾

- (18) **čogocči xoljicčipu.**

čogocči xolji-či + ri-pu

after.that dry-ITR + IM.P-1PL

そして、よく乾かします。

- (19) **joodopunggoori dootaini gijjeepu jologgoori,**
 joodopu(n)-ŋu + bAri doo-tAi-ni gida + ri-pu jolo-ŋu + bAri
 joodopu-AL + REF.PL inside-DIR-3SG pierce + IM.P-1PL stone-AL + REF.PL
girapsaggoori.

girapsa-ŋu + bAri

bone-AL + REF.PL

ヨードブの中に、石や骨を入れます。→ *Illust. 11, 12*

- (20) **čogocči kamdujčipu saggaani.**
 čogocči kamdu-du + ri-pu saŋa + bA-ni
 after.that glue-REV + IM.P-1PL hole + ACC-3SG
 そして、穴をくっつけてふさぎます。²⁴⁾

²³⁾ 観察時の制作ではイトウの椎骨を用いたが、ほかに小石、豆、あるいは *Illust. 11* の写真下に見えるような市販の鈴を入れることもある。

²⁴⁾ この工程では、魚皮がすでに乾いていて粘着性がない。そのため、(13)(14)と異なり、市販の接着剤で穴をふさぐ。



Illust. 12 工程(19)

joodopu	dootaini
joodopu(n)	doo-tAi-ni
joodopu	inside-DIR-3SG
giddauri	girapsaa,
gida+bu-ri	girapsa+bA
spear+IPSN-IM.P	bone+ACC
ʃoolloo	
ʃolo+bA	
stone+ACC	
ヨードプの中に骨や石を挿しこむ	

- (21) **xoldoutannee** **səurə** **poowani** **dapagačči,**
 xoldo+kutA-nnee səurə poo-bA-ni dapa-kAčči
 dry+PRF.CVB-3SG silk.cloth piece-ACC-3SG catch-SUB.CVB
daputakkuddooni **ulpipu.**
 daputakku-ddOO-ni ulpi+ri-pu
 handle-DSG-3SG sew+IM.P-1PL

乾いたら、絹の切れを取り、柄として縫います。→ *Illust. 13*

- (22) **čogocčči** **səurəmə** **leentəʃi** **kataraččipu.**
 čogocčči səurə-mA leentə-ʃi katara-či+ri-pu
 after.that silk.cloth-ADJ ribbon-INS bind-ITR+IM.P-1PL
 そして、絹のリボンを結びます。

- (23) **tari leentə** **sookkeeni** **suuraktaa** **tulleepu.**
 tari leentə soo-kkee-ni suurakta+bA tulə+ri-pu
 that ribbon end-PRL-3SG beads+ACC gill+IM.P-1PL
 そのリボンの端に大玉ビーズを付けます。

- (24) **joodopugupu,** **gəə,** **andupula.**
 joodopu(n)-ɲu-pu gəə andu-pulA
 joodopu-AL-1PL INTJ make-IPSN.PRF.P
 私たちのヨードプが、ほら、できた。→ *Illust. 14*



Illust.13 工程(21)

daputakkuddooni
 daputakku-ddOO-ni
 handle-DSG-3SG
(siiddooni) **ulpuri**
 sii-ddOO-ni ulpi+bu-ri
 handle-DSG-3SG sew+IPSN-IM.P
 柄として縫う



Illust.14 工程(24)：完成した「ヨードブ」
 (2本一組のうちの1本)

joodopuṇupu **andupula.**
 joodopu(n)-ṇu-pu andu-pulA
 joodopu-AL-1PL make-IPSN.PRF.P
 私たちのヨードブができた。

4. ウイルタ語北方言テキスト（ロシア字表記・ロシア語訳）

以下の内容は、本テキストの語り手ビビコワさんの確認と同意を得たものである。テキストのロシア語表記は、以下の音素目録によって筆者が表記したものをビビコワさんに目で見えて確認してもらった。

Гласные звуки: а[а, а], э[э], о[о], ө[о, ò, у[u], и[i], е[ε].

Согласные звуки: п[p], б[b], т[t], д[d], ч[tʃ], з[dʒ], к[k], г[g, γ~ʰ], м[m], н[n], н[n̥], ң[n̠], л[l], р[r], с[s, ʃ~sʲ], х[x], в[w], ј[j].

また、ロシア語訳はビビコワさん自身の訳を筆者が口述筆記したものである。これらを合わせて、語り手の直観により近い資料として、ここに提示する。

Текст:

(1) **Хоони јоодопумба андупури.**

Как сделать йодопу.

(2) **Јоодопумба андуми хайдда чипаали наада: пее моони, сундатта, сээрэ, сууракта, камду.**

Чтобы йодопу сделать разное всякое надо: берёза, рыба, шёлк, бусы, клей.

(3) **Доодуни эксэури золлооддоо гирапсааддаа нучиикэ нучиикэ абдумба.**

Во внутрь положить камни, косточки, маленькие маленькие предметы.

(4) **Пее моовани тубгури, чуҢгуллури, хооввури, эрэпчинэддэури.**

Берёзу надо срубить, разрезать, расколоть, постругать. → *Illust.2, 3, 4, 5*

(5) **Чогоччи наада согнуть лапами дуу соовани ујјури холдобуддоони.**

Потом надо согнуть, крепко накрепко две стороны перевязать, чтобы просушить. → *Illust.*

6, 7

(6) **Холзеедуни сундаттази оибонзипу.**

Когда будет сохнуть с рыбой возимся.

(7) **Сундатта субгуни хэсиктээни хэсисипу.**

У рыбьей кожи чешуйки очищаем.

(8) **Хэсигэччеери, анноони, зоччоони хээррипу.**

Очистив кожу, это самое, жир скоблим.

(9) **Муутэи улагаччеери силчипу.**

В воду опустив, стираем.

(10) **Уллеепу меелалу муутэи.**

Опять замачиваем в воде с мылом.

(11) **Силтугааччи силтугааччи, уллеепу даусулу муутэи.**

Стираем стираем, потом замачиваем в солёной воде.

(12) **Хэрээ хэрээ чаду биини тари субгу.**

Немного там находится эта кожа.

(13) **Чаңцоори сипиррипу, јоодопуңцоори сэгэриккеени туллеепу эвэсэи тава-саи тоонимари.**

Это самое выжимаем, на йодопу на остов натягиваем, туда-сюда растягивая. → *Illust.8*

(14) **Мээнэ камдузи лип даксеени моотой тари субгу.**

Своим клеем плотно прилипает к дереву эта рыбья кожа.

(15) **Эввеепэни таввеепани даксауккаччи холзипу.**

Эту и другую сторону приклеив сушим.

- (16) **Холдоутаннее иргаа андусипу дэвэми.**
Как высохнет, делаем орнамент в виде аппликации. → *Illust.9*
- (17) **Чаңцоори камдузи даксаунзипу.**
И эту аппликацию-орнамент клеим приклеиваем. → *Illust.10*
- (18) **Чогоччи холзиччипу.**
Потом подсушиваем.
- (19) **Јоодопуңцоори доотани ги́ззе́пу зо́лоңцоори, ги́рапсаңцоори.**
Во внутрь йодопу заталкиваем камни, косточки. → *Illust.11, 12*
- (20) **Чогоччи камдуззипу саңжаани.**
Затем дырочку заклеиваем.
- (21) **Холдоутаннее сэурэ поовани дапагаччи, дапутаккудоони улпипу.**
Как подсохнет, взяв кусочек шёлка, обшиваем ручку. → *Illust.13*
- (22) **Чогоччи сэурэмэ леентэзи катараччипу.**
Затем шёлковой лентой обвязываем.
- (23) **Тари леентэ сооккеени суурактаа туллепу.**
На конце той ленты бусы нанизываем.
- (24) **Јоодопуңупу, гээ, анду́пула.**
Наше йодопу всё готово. → *Illust.14*

Примечание к фотографиям *Illust.2~14*:

Illust.2

чуңгули́рула пее моони спиленные берёзовые чурбачки

Illust.3

хооввури рубим топором на пополам

Illust.4

эрэпчинэ струг

Illust.5

јоодопуңату моово гееввури палку для йодопу стругают

Illust.6

јоодопуңату моово мокчууллаури палку для йодопу согнуть

Illust.7

јоодопу сэгэрини холзеени скелет йоодопу сохнет

Illust.8

сундатта субгоони јоодопу сэгэриккеени туллэури рыбою кожу на скелет йодопу натянуть

Illust.9

саипула ирга нарисованный орнамент

Illust.10

иргаа камдузи даксаумбури орнамент клеим приклеить

Illust.11

налдума нириктаани эксэури жоодопутай тайменя позвонки ложат в йоодопу

Illust.12

жоодопу доотайни гиддаури гирапсаа, зооллоо Во внутрь йодопу заталкивать
косточки или камни

Illust.13

дапутаккудоони (сииддоони) улпури ручку (ручку) обшить

Illust.14

Жоодопуҗупу андупула. Наше йодопу готово.

略号一覧

- : 形態素境界 / = : 倚辞境界 / + : 融合 / 1 : 一人称 / 3 : 三人称 / ACC : 对格 / ADJ : 形容詞派生接尾辞 / AL : 譲渡可能接尾辞 / CAUS : 使役 / COOR : 同時 / COP : コピュラ動詞語幹 / DAT : 与格 / DIR : 方向格 / DSG : 指定格 / FIL : 言いよどみ / IM : 不完了 / IPSN : 非人称 / INTJ : 間投詞 / INS : 道具格 / ITR : 反復 / LOC : 場所格 / NEG : 否定動詞語幹 / NIM : 否定にともなう不完了動名詞 / NOM : 主格 / P : 分詞 (動名詞) / PL : 複数 / PRF : 完了 / PRL : 沿格 / PROP : 所有「～持ちの」 / PURP : 目的 / REF : 再帰所有 / REV : 回帰 / SG : 単数 / SUB : 従属 / VLZ : 動詞派生接尾辞

参考文献

池上二良

- 1982 『ウイльтаの暮しと民具』網走市北方民俗文化保存協会。
- 1997 『ウイльта語辞典』北海道大学図書刊行会。
- 2001a 「ウイльта語の南方言と北方言の相違点」『ツングース語研究』: 247-283、汲古書院 [初出: 1994 『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38]。
- 2001b 「ウイльта語動詞活用大要」津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』7 (文部省特定領域研究 (A): 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A 2-002): 157-166、大阪学院大学。

菊池俊彦

- 1997 「北の民俗誌: 解説」谷川健一 (責任編集) 『北の民俗誌: サハリン・千島の民族』: 551-570、三一書房。

高橋盛孝

- 2006 「南樺太ギリャク族調査紀要」菊池俊彦 (編) 『サハリン北方先住民族文献集: 人類学・民族学篇 1905-45』: 59-66、北海道大学大学院文学研究科 [初出: 1929 『民族』4(2): 143-153]。

津曲敏郎

- 1988 「ウイльта語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』1: 744-746、三省堂。

北海道教育庁振興部文化課 (編)

- 1974 『オロッコ・ギリャーク民俗資料調査報告書』北海道文化財保護協会。

澗潟久治 (編)

- 1981 『ウイльта語辞典』網走市北方民俗文化保存協会。

山田祥子

- 2010a 「ウイльта語北方言にみられる動詞語尾-li について」呉人恵 (編) 『環北太平洋の言語』15: 85-100、富山大学人文学部。
- 2010b 「【講演会等報告】講演と唄の夕べ: サハリン先住民族言語を伝え、残す」『北海道民族学』6: 60-67、北海道民族学会。

山田祥子・笹倉いる美

2010 「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料Ⅰ：対応する北方言の語彙を中心に(1)」『北海道立北方民族博物館紀要』19：89-109、北海道立北方民族博物館。

ローン、タチヤーナ（著）、永山ゆかり・木村美希（共訳）、津曲敏郎・加藤博文（監訳）

2005 『サハリンのウイルタ：18-20世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』北海道大学大学院文学研究科。

Federal'naja sluzhba gosudarstvennoj statistiki（本文中はFSGSと略す）

2004 “Rasprostranennost' vladenija jazykami (krome russkogo)”. In *Vserossijskaja perepis' naselenija 2002 goda*. Tom 04-04. <http://perepis2002.ru/>（2010年12月1日閲覧）

Ikegami, J.

2001a “The verb inflection of Orok”. 『ツングース語研究』：24-66、汲古書院〔初出：1959『国語研究』9：34-73、国学院大学国語研究会〕。

2001b “Orok Verb-Stem-Formative Suffixes”. 『ツングース語研究』：66-72、汲古書院〔初出：1973『北方文化研究』7：1-17、北海道大学北方文化研究施設〕。

2001c “Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen”. 『ツングース語研究』：395-396、汲古書院〔初出：1974 *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Voelker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin*. 271-272. Berlin: Akademie-Verlag〕。

Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva

2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski*. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.

Mamcheva, N. A.

2003 *Obrjadovye muzykal'nye instrumenty aborigenov saxalina*. Juzhno-Saxalinsk: Izdatel'stvo Saxlinskogo gosudarstvennogo universiteta..

Missonova, L. I.

2006 *Ujl'ta saxalina: Bol'shie problemy malochislennogo naroda*. Moscow: Izdatel'stvo Nauka.

2009 “Olenevodstvo i identichnost' Ujl'ta Saxalina (sovetskij i postsovetskij periody)”. In *Acta Slavica Iaponica*, 27: 177-199. Sapporo: Hokkaido University.

Ozolinja, L. V.

2001 *Oroksko-russkii slovar': okolo 12000 slov*. Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN.

Ozolinja, L. V. & I. Ja. Fedjaeva

2003 *Oroksko-russkii i russko-orokskii slovar'*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.

Petrova, T. I.

1967 *Jazyk Orokov (Ul'ta)*. Leningrad.

Roon, T. P.

1996 *Ujl'ta saxalina: Istoriko-etnograficheskoe issledovanie traditsionnogo xozhajstva i material'noj kul'tury XVIII - serediny XX vekov*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe oblastnoe knizhnoe izdatel'stvo / Saxalinskij oblastnoj kraevedcheskij muzej.

Tsumagari, T.

2009 “Grammatical outline of Uilta (Revised)”. In *Journal of the Graduate School of Letters*, Vol. 4: 1-21, Sapporo: Hokkaido University.

Vasil'ev B. A.

1929 “Osnovnye cherty etnografii orokov: predyvritel'nyj ocherk po materialam ekspeditsii 1928g.”. *Etnografija*. 1: 3-22. Moskva-Leningrad.

Vishnevskij N. V.

1994 *Otasu: Etno-politicheskie ocherki*. Juzhno-Saxalinsk: Dal'nevostochnoe knizhnoe-izdatel'stvo, Saxalinskoe otделение.

2000 *Saxalin i Kuril'skie ostrova: Kratkij entsiklopedicheskij spravocchnik*. Juzhno-Saxalinsk: Gosudarstvennyj arxiv Saxalinskoj oblasti, Saxalinskij tsentr dokumentatsii novejshej istorii.

Yamada, Y.

2010 "A preliminary study of language contacts around Uilta on Sakhalin". In *Journal of the Center for Northern Humanities*, Vol.3: 59-74, Sapporo: Hokkaido University.

A Type of Shaken Musical Instruments *joodopu* of the Uilta: with the Text in Uilta Northern Dialect Representing Process of Restoration

Yoshiko YAMADA

Graduate student, Hokkaido University/JSPS research fellow

This article aims to introduce a type of musical instrument of the Uilta (an indigenous people on Sakhalin Island; their traditional language Uilta belongs to the Tungusic languages) called *joodopu*, which is shaken in each hand to produce sounds.

The first half (Chapter 1) of this article describes an introductory study on the instrument *joodopu* based on literatures and some interviews. *Joodopu* was described by Magata (1981) and Ikegami (1982, 1997) according to their investigations on the southern group of the Uilta, who lived in Poronai region during the period of Japanese domination. Whereas the northern group of the Uilta seems to have used the common instrument until 1940s, they apparently did not hand it down after that. As a result the name of the instrument is unknown in Northern Dialect.

One of the northern Uilta, Ms. Elena Alekseevna Bibikova (born in a camping place Dagi in 1940) did know neither the name nor the details about *joodopu*. In the beginning of the 1990s she got to remember through the photograph in Ikegami (1982: 32; *Illust. 1-1, Illust. 1-2*), that she had seen how an Uilta woman danced with the same instruments on a festival in her childhood. After that Ms. Bibikova started to restore it making full use of various traditional arts (e.g. woodwork, cutting patterns of motifs etc.) which she had acquired. Today she is perhaps the only maker of the instrument as one of the Uilta modern handicrafts.

The second half (Chapter 2~4) shows a text by Ms. Bibikova in her mother tongue, the Northern Dialect of Uilta, explaining: how she makes *joodopu* today. The present author first observed the process of her work, and then wrote down her explanation in October 27th 2010 in Nogliki, Sakhalin oblast. In November 3rd 2010, the author and MS. Bibikova together collated the pictures and the text, and in December 3rd 2010 put captions to the pictures.